

アンドレア・バッティストーニ

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

Andrea Battistoni

Chief Conductor of the Tokyo Philharmonic Orchestra

1987年ヴェローナ生まれ。アンドレア・バッティストーニは、国際的に頭角を現している若き才能であり、同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年1月よりジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場の首席客演指揮者に、年間にオペラ2作品、交響曲公演2プログラムを指揮する3年契約で就任。2016年10月、東京フィルハーモニー交響楽団首席指揮者に就任。

東京では『ナブッコ』（二期会）等のオペラ、ローマ三部作等の交響曲プログラムで東京フィルを指揮し、そのカリスマと繊細な音楽性でセンセーションを巻き起こした。東京フィルとのコンサート形式『トゥーランドット』（2015年）、『イリス（あやめ）』（2016年）では批評家、聴衆両者に対し音楽界を牽引するスターとしての評価を確立。東京フィルとは日本コロムビア株式会社より6枚のCDを発表している。

注目すべきキャリアとしては、スカラ座、トリノ・レージョ劇場、カルロ・フェリーチェ劇場、ヴェニス・フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場、マリンスキー劇場等と共に、東京フィル、スカラ・フィル、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル、ベルリン・ドイツ・オペラ等世界的に最も著名なオーケストラ等とも多くの共演を重ねている。

今後の予定としては、ベルリン・ドイツ・オペラ、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン州立歌劇場、トリノ・レージョ劇場、ネザーランド・オペラ、サンティアゴ市立劇場、シドニー・オペラハウス等への出演がある。

2017年には初の著書『マエストロ・バッティストーニの ぼくたちのクラシック音楽』（原題「Non è musica per vecchi」の日本語版）を音楽之友社より刊行。

Website <http://www.andreabattistoni.it/>

Facebook <https://www.facebook.com/Andrea-Battistoni-159320417463885/>



©上野隆文

東京フィルの「若大将」、 バッティストーニが千葉にやって来る!

解説=池田卓夫(音楽ジャーナリスト)

誰もが最初は驚き、次に魅了され、最後は大きな満足感とともに会場を後にするだろう。アンドレア・バッティストーニが東京フィルハーモニー交響楽団(通称=東京フィル)と奏でるオペラもシンフォニーも、いつも「出来立てホヤホヤ」の熱気に満ち、クラシック音楽を長く聴き込んだ人、初めて接する人それぞれの人生に、新たな輝きをもたらす。

東京フィルの楽員は、バッティストーニに「一目惚れ」だった。2012年2月、東京二期会のオペラ『ナブッコ』（ヴェルディ作曲）で偶然に出会ったが、すぐさま「相思相愛」となって楽団主催の定期演奏会に招き、2015年に首席客演指揮者、2016年に首席指揮者……と関係を深めてきた。バッティストーニと東京フィルは今、東京で最も人気のあるコンビだ。

「ロミオとジュリエット」の街、イタリアのヴェローナで医師の家に生まれ、チェロや作曲と並行して文学にも傾倒。感性と知性に彩られた少年時代を経て、20代前半でマエストロ(巨匠)へのチケットを手に入れた。今年31歳。東京フィルの「若大将」、満を持しての千葉デビューは間違いなく、新たな街で新たなファンを獲得するはずだ。

楽曲解説

解説◎池田卓夫(音楽ジャーナリスト)

ダダダ・ダーン!!!～本当に「運命」は扉をたたくのか？

ベートーヴェンの「交響曲第5番 ハ短調 作品67」は、「運命」の標題とワンセットで語られる。実はこれ、クラシック音楽に興味のない人でも知っている楽曲アタマ「ジャ・ジャ・ジャ・ジャーン!」の4音動機に関し、最晩年に交流のあったアントン・シンドラーが作曲家自身の言葉として「運命はこのように扉を叩く」と記したことで広まった俗説だ。人類が艱難辛苦(かんなんしんく=人生の困難や苦勞)を経て最終的な勝利に至るまでのプロセスを劇的に描いた傑作交響曲にとって、「運命」は本当に人生最初の一撃でしかない。英語圏でかつて使われた「ヴィクトリー・シンフォニー(勝利の交響曲)」のニックネームの方がまだしも、作品の真価を表しているといえる。

18世紀後半に本格化した産業革命は、それまでの貴族でも農民でもない富裕市民(ブルジョワ)という新しい階層を生み出し、王侯貴族や教会の定めたルールに従った社会構造を大きく揺るがし始めた。交響曲第5番の完成は1808年。ベートーヴェンにとっての「勝利」とは、自身のフリーランス作曲家としての葛藤ではなく、普遍的な人間性の解放を意味していた。4音動機は第1楽章で執拗に反復されるだけにとどまらず、全

曲のいたるところに現れ、すべての人間を徹底して鼓舞する「アイコン」のように扱われている。叩いているのは扉ではなく、人々の背中である。

続く時代のフランス人作曲家で、ベートーヴェン作品の指揮者としても定評のあったベルリオーズは出世作の「幻想交響曲」に全曲を通じて姿を現す旋律の「固定楽想」を導入した。ベートーヴェンの4音動機は、失恋相手の女性を表現したベルリオーズとは異なるが、明らかに固定楽想の先がけをなす斬新なアイデアだ。さらにトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが交響曲史上初めて用いられ、勝利のクライマックスを盛り上げていく。

激しい第1楽章、穏やかな第2楽章を経て再び激しい闘争心をみせる第3楽章。一瞬の静けさの直後、勝利への大爆発が起きる第4楽章には切れ目なく続き、弾く者も聴く者も熱狂に包まれる。最後は「だめ押し」の連続で、なかなか終わらないのも特徴の1つ。勝利の実感をより、確かなものにする。バッティストーニと東京フィルの演奏は息もつかせない迫力に満ち溢れ、一気に勝利へとなだれ込む。

バッティストーニの「ベト7」を聴いたら、今夜は眠れない

「交響曲第7番 イ長調 作品92」(1812年)には、「運命」に匹敵するタイトルがない。だが、後にワーグナーが「舞踏の神格化」と評したように、音楽の3要素(リズム、メロディー、ハーモニー)の中でもリズムの多様性、反復に徹底してこだわり、躍動感と推進力で際立つ楽想は古くから、日本のクラシック音楽ファンの間でも人気が高かった。

「大異変」が起きたのは2001年、21世紀最初の年だ。漫画家の二ノ宮知子が講談社の雑誌「Kiss」で10年にわたって連載した「のだめカンタービレ」が話題を呼び、2006年にはフジテレビが上野樹里、玉木宏らの出演でドラマ化、さらに特別編、アニメ版、映画版が制作されるに及ぶ大当たりをとった。テレビ版で主題曲に選ばれ、クラシック音楽になじみのない人にも愛されたのがベートーヴェンの7番であり、以後、日本では「ベト7(しち)」と呼ばれるようになった。一時は年末の「第9」ラッシュに似て、「ベト7」さえ演奏すれば客入りは安泰という状態が続いた。それまでクラシックのオーケストラ演奏会に自ら足を運んだことのない若者を獲得できた点で、意義のある現象だった。

テレビ版には東京都交響楽団の当時の常任指揮者だった米国人、ジェイムズ・デプリーストが出演し、サウンドトラックの制作にも加わった。デプリーストは5年前に亡くなったが、もしも今「のだめ」のリメイクが決まり「誰をゲストに呼ぶか」といった話になったら、若く血気盛んで、老若男女を熱狂に巻き込むバッティストーニに白羽の矢が立つのではないか？

バッティストーニの「ベト7」は間違いなく興奮できる。だが、もう一方の美点も忘れてはいけない。長い序奏のあと「リズムの祭典」が始まる第1楽章、はじけるスケルツォの第3楽章、「ベト7」のエネルギーが極限に達する第4楽章の3つとは対照的に、第2楽章は「タータタ・ターター」という荘重なリズムが支配する。漫画の題にも使われた「カンタービレ」とは、イタリア語で「歌うように」の意味。オペラの国イタリアに生まれ育ち、歌劇場を活動拠点とするバッティストーニにとって、カンタービレは「命」「血」「水」などに匹敵する基本であり、第2楽章をとことん歌い上げるはず。深い感動から人生とリズムの勝利までを体験した聴き手は今宵、簡単には眠れないだろう。

FOLLOW UP!

人類に捧げる愛情と 独立独歩の精神が ベートーヴェンの肝



ドイツのボンからウィーンに出た鍵盤演奏の天才少年は作曲家としても頭角を現した。妥協を許さない性格や、フランス革命が打ち出した「人類みな平等」という当時画期的な思想を背景に、ベートーヴェンは貴族のスポンサーシップを次第に離れ、音楽史上初の「フリーランスコンポーザー&ピアニスト」となった。

成功と失敗を繰り返しながら評価を高めつつあった矢先、音楽家には致命的な耳の病に見舞われ、一段と複雑系の人格に……。孤独な闘いの日々にも音楽と社会の未来を信じ、絶えず最先端の楽器を取り寄せ、当時の性能では追いつかないほど多くの音符を記した。半面、子どもたちや何気ない民謡にも温かな眼差しを注ぎ、心から編み出した旋律を惜しげなく注ぐ作曲の根底には、「人類」とその文化への深い尊敬と愛情があった。今も大きな災害や事故、テロなどが起きた後、人々を慰め励ますチャリティーコンサートでベートーヴェンを奏でる音楽家が圧倒的に多い理由は、そのヒューマニズムにある。

いけだ・たくお／早稲田大学政治経済学部政治学科を1981年に卒業し、新聞記者となった。東京や広島、フランクフルトで経済分野を取材。「ベルリンの壁」崩壊から旧東西ドイツの統一を現地から報道。帰国後に音楽担当の編集委員を長く務めた。音楽についての執筆は高校生時代に始め、専門雑誌への寄稿歴は30年を超える。演奏会やオペラ、CDなどの企画、MC(司会)、翻訳、音楽コンクールの審査なども手がける。